

# 史跡教王護国寺境内

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇〇九―一三

史跡教王護国寺境内

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 史跡教王護国寺境内

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、防災施設事業に伴う史跡教王護国寺境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

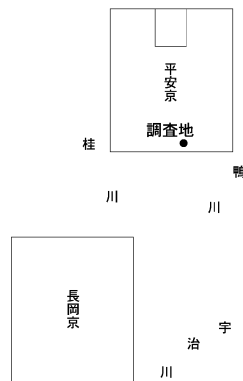
平成 22 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 史跡教王護国寺境内
- 2 調査所在地 京都市南区九条町1番地
- 3 委 託 者 宗教法人 教王護国寺 代表役員 森 泰長
- 4 調査期間 2009年11月9日～2009年12月9日
- 5 調査面積 発掘調査：約5.5㎡、立会調査：延約530m
- 6 調査担当者 近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 12 本書作成 近藤章子
- 13 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	6
(1) 発掘調査	6
(2) 立会調査	7
4. 遺 物	9
(1) 瓦類	9
5. ま と め	13

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1 トレンチ全景（北から）
		2	1 トレンチ西壁（東から）
図版2	遺構	1	立会No.4（東から）
		2	立会No.4 瓦敷検出状況（東から）
図版3	遺構	1	立会No.20（西から）
		2	立会No.20 凝灰岩検出状況（西から）
図版4	遺物		軒瓦・文字瓦
図版5	遺物		丸瓦・平瓦・埴

# 挿 図 目 次

図1	調査位置図および伽藍復元図（1：2,000）	1
図2	調査前全景（北から）	2
図3	調査風景（北から）	2
図4	周辺の調査位置図（1：2,500）	3
図5	1トレンチ東壁・北壁断面図（1：40）	7
図6	立会調査断面柱状図（1：20）	8
図7	軒瓦・文字瓦・丸瓦拓影・実測図（1：4）	11
図8	平瓦・塼拓影・実測図（1：4）	12

# 表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	10





図2 調査前全景（北から）



図3 調査風景（北から）

今回、防災施設事業に伴い調査を行った。掘削工事の区域の大部分は、1962年に施工した排水溝工事および1977年から1981年にかけて行った防災工事の埋設管掘形内にあたるため、この部分については工事掘削時に立会調査を行った。新たに掘削を行う箇所については、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに調査区を設定し、発掘調査を行った。調査は2009年11月9日から12月9日まで実施した。

発掘調査は金堂の南東約20mの位置に、東西1m、南北5.5mの調査区を設定した。ここは伽藍復元図によると空閑地であるが、史跡指定地であるため、現地表面からすべて人力による掘削を行った。その結果、地表下0.2～0.25mで平安時代から鎌倉時代の瓦を多量に含む層を検出した。それ以下は施工上の掘削深度の制限があるため、調査区北端の一部を断ち割り、地山の確認を行った。調査で出土した瓦の内、「左寺」銘の刻印のある瓦が3点出土した。

立会調査は境内23箇所です断面観察・実測・写真記録を行った。大半が旧埋設管をトレースして工事を行うため、ほとんどがその盛土や埋土内であるが、講堂の西側で瓦を多量に含む層を確認した。また、一部で焼土層や凝灰岩を検出した。

## 2. 遺 跡

### (1) 位置と環境

平安京造営以前の調査地一帯は、礫質砂層の堆積状況から旧河道の存在とその流路が推定される。周辺での調査においても、現地地表下2.0mで北東から南西方向の自然流路や後背湿地が確認されており、当地域の地形形成過程が明らかにされている。

東寺旧境内は平安京条坊復元によると、左京九条一坊九町から十六町の8町域を占める。北は八条大路、東は大宮大路、南は九条大路、西は壬生大路に囲まれる。主要伽藍はその内の南側4町分で、北4町には造営当初は東寺の経営を支えた花園院・倉垣院・大衆院・政所院があったと推測されている<sup>1)</sup>。鎌倉時代末期には大小の子院が建てられ始め、現在ではその一部は洛南中・高等学校や保育園、民家となっている。



表1 周辺の調査一覧表

No.	調査地	調査方法 調査記号	調査期間 調査機関 (担当者)	調査 面積	主な遺構	主な遺物	文 献
1	金堂	解体修理 発掘	1936～1940年 京都府教育庁文化財 保護課		金堂解体修理中の発掘調査 で創建時の講堂の基壇・礎 石を確認。		『重要文化財教王護国寺講堂 修理工事報告書』京都府教 育庁文化財保護課 1954年
2	講堂	解体修理 発掘	1950～1953年 京都府教育庁文化財 保護課		講堂解体修理中の発掘調査 で創建時の講堂の基壇・礎 石・地覆・羽目板・須弥壇 を確認。		同上
3	宝蔵・ 大師堂	解体修理 発掘	1954.4.1～1955. 12.31 京都府教育庁 文化財保護課		宝蔵解体修理中の発掘調査 で宝蔵の北側で礎石群を確認。 。	瓦出土。	『重要文化財教王護国寺宝蔵 ・大師堂修理工事報告書』 京都府教育庁文化財保護課 1960年
4	灌頂院・ 北門・ 東門	解体修理 発掘	1956.1.1～1959. 3.31 京都府教育庁 文化財保護課		礎石据付状況・根石・基壇 の状況を確認。	瓦出土。	『重要文化財教王護国寺灌頂 院並北門・東門修理工事報 告書』京都府教育庁文化財 保護課 1960年
5	五重塔	解体修理 発掘	1959.4.1～1960. 12.31 京都府教育庁 文化財保護課		基壇を確認。	基壇下、瓦出土。	『国宝教王護国寺五重塔修理 工事報告書』京都府教育庁 文化財保護課 1960年
6	伽藍 (金堂・講 堂東側)	立会	1962.9.4 鳥羽離宮跡調査研究 所(杉山信三)	約 370 m	平安時代：金堂および講堂 の軒廊。		『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調 査研究所 1979年
7	伽藍東築 地(消防 署東寺出 張所)	発掘	1972.1.24～2.5 (財)古代学協会 (上野佳也・田中勝弘)	47m <sup>2</sup>	平安時代：築地基壇、礎石、 江戸時代：堀。	平安～江戸時代：瓦類、 陶磁器類、金属製品、 銭貨。	『東寺東側築地外発掘調査報 告』『古代文化 第27巻 第1 号』(財)古代学協会 1975年
8	南大門 (九条通北 側歩道)	立会	1975.6.27～8.14 鳥羽離宮跡調査研究 所(岩城 徹)		中世：濠。	瓦類、鬼瓦。	『日本電信電話公社九条局加 増工事に伴う教王護国寺南 大門前発掘調査概要』埋蔵 文化財発掘調査概報集 1976 年 鳥羽離宮跡調査研究所 1981年
9	伽藍内 (防災施設 工事)	発掘	1977.12～1981.4 近畿大学理工学部 建築学科杉山研究室		中門・回廊・経蔵・僧房な どを発見。	平安～江戸時代：土師 器、緑釉陶器、須恵器、 青磁、白磁、瓦類、銭 貨。	『教王護国寺防災施設工事・ 発掘調査報告書』教王護国 寺 1981年
10	旧境内 (子院) 洛南高等 学校	発掘	1979.5.21～8.30 東寺境内発掘調査団 洛南高校班 (岩城 徹・畑美樹徳)	約 1200 m <sup>2</sup>	平安～江戸時代：基壇状遺 構、集石遺構、溝、湧泉地 跡、土坑、井戸、瓦窯跡、 旧宝菩提院跡。	平安～江戸時代：土師 器、緑釉陶器、灰釉陶 器、須恵器、瓦器、陶 器類、瓦類、木製品、 銭貨。	『洛南高等学校新築体育館用 地埋蔵文化財調査報告』東 寺境内発掘調査団洛南高校 班 1981年
11	旧境内 (子院) 洛南会館	発掘 88 HK-ZE	1988.7.11～8.2 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(上村和直)	184.5 m <sup>2</sup>	平安時代以前：溝。 鎌倉～室町時代：溝、土坑、 柱穴、建物跡。 近世：溝、土坑。	平安～室町時代：土師 器、須恵器、緑釉陶器、 瓦器、瓦類、白磁、青 磁、砥石。	『平安京左京九条一坊・東寺 旧境内2』『昭和63年度京 都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究 所 1993年
12	八幡宮	発掘 88 HK-TG2	1988.10.24～12.27 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(上村和直)	168m <sup>2</sup>	平安時代：土坑、溝、柱穴。 鎌倉時代(八幡宮社殿跡)： 土坑、礎石、溝、建物亀腹、 柱穴。室町時代(八幡宮社 殿跡)：土坑、柱穴、溝、 建物跡。近世～近代：土坑。	平安～室町時代：瓦類、 土師器、須恵器、緑釉 陶器、白磁、礎石、陶 器、磁器。	『平安京左京九条一坊・東寺 旧境内1』『昭和63年度京 都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究 所 1993年
13	蓮華門・ 北大門・ 慶賀門・ 北総門	解体修理	1989.8.31～1994. 6.30 京都府教育庁 文化財保護課		慶賀門：基壇・礎石。 北大門：基壇・礎石・雨落 溝、鎮壇土師器埋納遺構。 北総門：基壇・礎石・雨落 溝。	瓦出土。	『国宝教王護国寺蓮華門・北 大門・慶賀門・北総門修理 工事報告書』京都府教育庁 文化財保護課 1995年
14	慶賀門隣 接・東築 地(東寺 前派出所)	発掘	1992.6.10～7.15 (財)京都市埋蔵文化 財調査研究センター (引原茂治)	40m <sup>2</sup>	鎌倉～江戸時代：溝、基壇 状遺構。	平安～江戸時代：土師 器、灰釉陶器、緑釉瓦、 瓦器、陶器類、瓦類。	『史跡教王護国寺』『京都府 遺跡調査概報 第48冊』(財) 京都市埋蔵文化財調査研究 センター 1992年

No.	調査地	調査方法 調査記号	調査期間 調査機関 (担当者)	調査 面積	主な遺構	主な遺物	文 献
15	講堂 須弥壇	確認 98 HK-TG3	1998.7.6～8.19 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(鈴木久男)	11㎡	江戸時代：土坑。	江戸時代：銭貨、瓦、 土師器、釘、鏝、埴、 瓔珞。	『東寺講堂須弥壇』『平成10 年度京都市埋蔵文化財調査 概要』(財)京都市埋蔵文化 財研究所 2000年
16	講堂 須弥壇	確認 99 HK-TG 3-2	2000.1.17～1.25 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(平尾政幸)	6.5㎡	平安時代：須弥壇版築、護 摩跡土坑、杭跡。 室町時代：再建須弥壇地業。 桃山時代：須弥壇化粧土。	平安時代：平瓦、丸瓦、 銅銭、緑釉瓦、焼土。	『東寺講堂須弥壇』『平成11 年度京都市埋蔵文化財調査 概要』(財)京都市埋蔵文化 財研究所 2002年
17	旧境内 (子院)	発掘 01 HK-ZT1	2001.6.14～2002. 3.29 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(吉崎 伸 ほか)	3811 ㎡	古墳時代以前：河川。平安 時代：井戸、土坑、瓦溜。 鎌倉～室町時代：建物、柱 穴、柵列、室、井戸、土坑、 溝。江戸時代：建物、柵列、 石垣、カマド群、井戸、土 坑、埋納土坑(地鎮)、溝、 池、排水施設。	古墳時代：古式土師器、 須恵器。 平安～江戸時代：土師 器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器、輸入磁器、 陶器類、瓦類。	『東寺(教王護国寺)旧境内』 京都市埋蔵文化財研究所発 掘調査概報2001-7(財)京 都市埋蔵文化財研究所 2002年
18	旧境内 (子院)	発掘	2008.3.5～5.31 古代文化調査会 (上村憲章)	1209 ㎡	平安～江戸時代：土坑、柱 穴、濠、井戸、溝、大宮大 路西側溝・小径、室町時代 の濠跡。	平安～江戸時代：土師 器、須恵器、黒色土器、 緑釉陶器、灰釉陶器、 瓦器、陶器類、瓦類、 石仏。	『平安京左京九条一坊十六町 東寺旧境内遺跡』古代文化 調査会 2009年
19	旧境内 (観智院)・ 灌頂院、 北総門	立会 08 HK-TG4	2009.3.10～3.24 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(小松武彦)	10㎡	鎌倉～室町時代：土坑、整 地層。 江戸時代：土坑。	平安～江戸時代：土師 器、瓦器、瓦類。	未報告
20	旧境内 (子院) 東寺保育 園	発掘 09 HK-TG5	2009.5.25～7.1 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(加納敬二)	330㎡	平安時代：建物、柵、井戸、 土坑。 鎌倉時代：井戸、土坑、溝、 堀状遺構。 江戸時代：建物、布掘柱列。	平安～江戸時代：土師 器、須恵器、瓦器、緑 釉陶器、灰釉陶器、輸 入陶磁器、瓦器、陶器 類、磁器、瓦類。	『教王護国寺旧境内(東寺旧 境内)』京都市埋蔵文化財研 究所発掘調査報告2009-3 (財)京都市埋蔵文化財研 究所 2009年
21	伽藍内	発掘・ 立会 09 HK-TG6	2009.11.9～12.9 (財)京都市埋蔵文化 財研究所(近藤章子)	5.5㎡ 約 530m	金堂東回廊西側凝灰岩、 中世の瓦溜。	平安～江戸時代：土師 器、瓦類、銭貨。	本報告

東寺の創建は平安京と平行して造営され、まず金堂が建立される。弘仁十四年(823)、嵯峨天皇から空海に下賜され、その後に五重塔・講堂などが建立され、主要な伽藍が整備される。平安時代中期には衰退し始め、平安時代後期には荒廃が著しくなる。しかし文治五年(1189)に文覚が修理上人となり、その後、建久年間(1189～)から正治元年(1199)にかけて源頼朝の援助により本格的な修造が行われる。<sup>2)</sup>

現在の東寺伽藍には創建当初の建物は存在しておらず、全て後世に再興されたものであるが、その位置は創建当初を保ったままである。金堂・講堂は文明十八年(1486)の土一揆で焼失し、金堂は慶長八年(1603)豊臣秀頼の寄進により再建され、講堂は延徳三年(1491)に再建されたものである。また、五重塔は落雷や不審火による火災で4回焼失し、現在の塔は寛永二十一年(1644)、徳川家光の寄進により再建されたものである。

## (2) 周辺の調査(図4、表1)

東寺では1940年に金堂(1)、1953年に講堂の解体工事に伴う調査(2)が行われ、1962年に排水用水路の工事に伴って調査(6)を行い、それぞれ回廊の存在が確認された。1972年には境内北東角に位置する消防局の調査(7)で創建当初の築地が確認された。1975年には電話線

敷設工事に伴う調査（8）で境内南側の濠が中世に造られたことが確認された。その後、1977年から1981年にかけて境内全域で防災施設工事に伴い、43箇所調査区を設けた大規模な調査（9）が行われた結果、主要な伽藍の配置が判明した。1988年には南大門西、境内南西部で1868年（明治元年）に焼失した鎮守八幡宮の再建に伴う調査（12）が行われ、建物跡をはじめ平安時代から近世の各時期の遺構が検出された。建物跡は調査後、地中に保存されている。この調査では数基の瓦溜が検出されている。また、洛南高校内で行われた発掘調査（10）では、平安時代前期の瓦窯に伴う遺構が検出され、境内瓦窯の存在が確認されている。近年では、2000年に講堂須弥壇の調査（16）が行われ、創建時の須弥壇とその版築の状況や護摩跡などが確認された。昨年は、防災工事に伴う調査（19）で、観智院では子院造営時の整地層を確認し、灌頂院では平安時代末期から鎌倉時代の再建時に伴う整地層が確認された。

### 3. 遺 構

#### （1）発掘調査（図5、図版1）

1トレンチ 基本層序は盛土以下、近代の整地層、地表下0.18mで10YR6/3にぶい黄橙色・10YR5/6黄褐色砂泥（旧整地層）、0.2mで10YR5/2灰黄褐色砂泥層、0.25mで10YR6/2灰黄褐色砂泥層（瓦混入整地層）、0.7m以下は10YR3/2黒褐色泥土粘質の地山である。

地表下0.18～0.2mで検出した各層は、固く締まりがある。これらはその下面から寛永通寶が出土しているため、江戸時代以降の整地層と考えられる。

地表下0.25mで平安時代から鎌倉時代の瓦を多量に含む層を検出した。層厚は0.45mである。調査区の範囲内で肩部などを検出できなかったため、瓦を含む整地層と考えた。しかし、北端で黒褐色泥土粘質層がブロック状に混入しており、下層の地山層を一部掘り込んだ形跡がみられることから、土坑の埋土の可能性もある。

調査区の北端の一部を断ち割り、地表下0.7mで地山の黒褐色泥土粘質層を確認した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代後期	土坑（立会No.23）
鎌倉時代	瓦層（1トレンチ）
時期不明（平安時代か）	凝灰岩（立会No.20）
近世～近代	整地層（各立会箇所）、瓦敷（立会No.4）



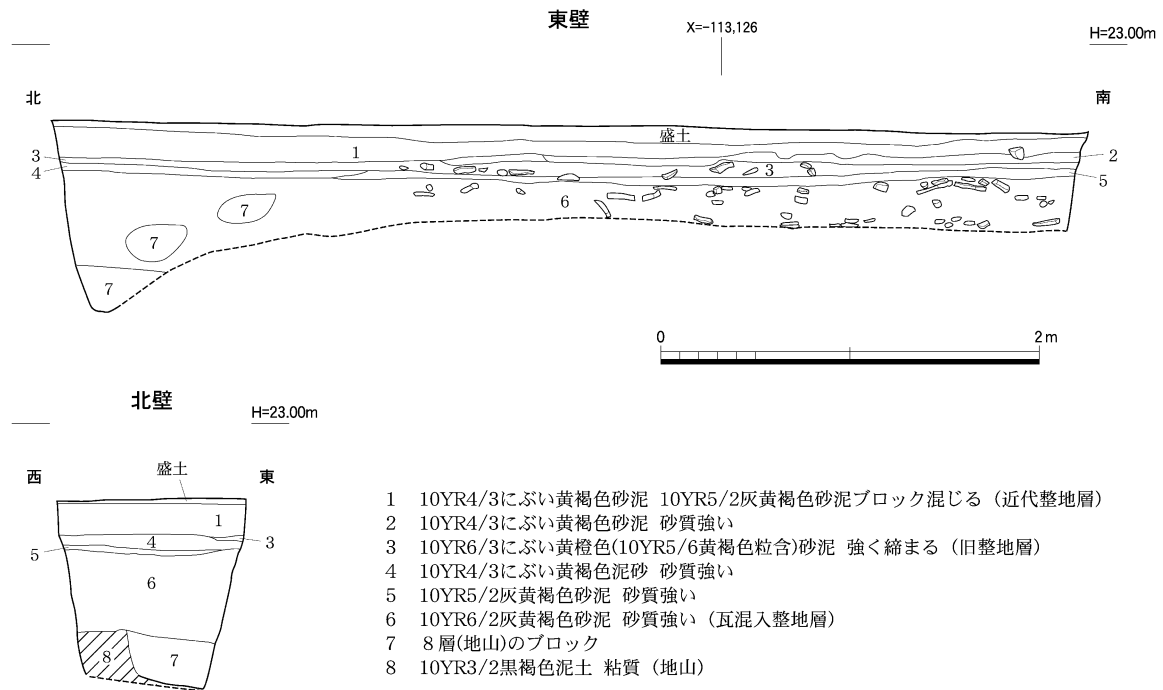


図5 1トレンチ東壁・北壁断面図(1:40)

## (2) 立会調査(図6、図版2・3)

工事掘削は概ね0.4～0.5mと浅く、旧管理土内にとどまったため遺構面まで達していない箇所が大半である。しかしながら、一部で鎌倉時代から江戸時代と考えられる整地層が確認できた。以下、各調査地点の概要を示す。

No.1～3(太子堂東側) 掘削深度は約0.4～0.5mである。現代盛土・旧地表面・近世以降の整地層を確認した。

No.4(毘沙門堂築地東側) 築地延石東面で断面観察を行った。地表下0.1mで整地層、0.16mで焼土・土師器小片・瓦を含む暗褐色砂泥層を検出した。土師器が小片であるため時期は不明である。0.3mで平瓦が南北に2枚並んだ状態で検出した。用途は不明であるが、築地に関連する可能性がある。工事掘削はこの面までとした。また、瓦の西側は築地直下に続くため、瓦は現状保存とした。

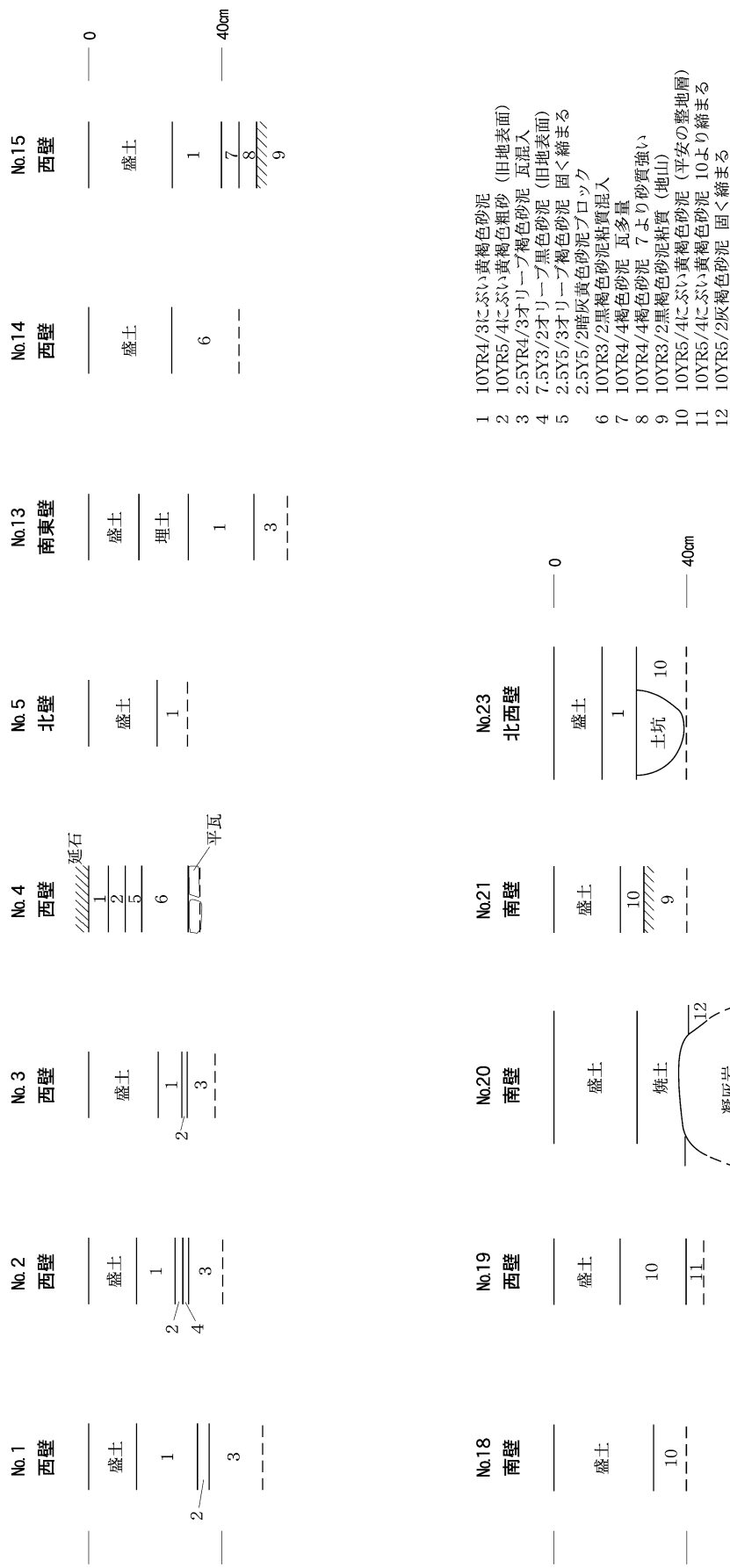
No.5(食堂西側) 地表下0.2mで土師器微片を含むにぶい黄褐色砂泥層を検出した。固く締まりがあるため旧整地層であろう。

No.6～10(宝物館前築地南側) すべて地表下0.5mまで盛土・既存管の埋土のみであった。No.6で表採であるが、軒丸瓦を採取した。

No.11・12(北大門南側から詰所前) 盛土・既存管の埋土のみであった。No.12で表採であるが軒平瓦を採取した。

No.13(宝物館前石畳東) 地表下0.15～0.6mまで旧整地層。表採であるが、軒平瓦を採取した。

No.14(食堂南東西石畳横断) 地表下0.25mで黒褐色砂泥粘質層を検出した。地山層に近いが、



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 (旧地表面)
- 3 2.5YR4/3オリーブ褐色砂泥 瓦混入
- 4 7.5Y3/2オリーブ黒色砂泥 (旧地表面)
- 5 2.5Y5/3オリーブ褐色砂泥 固く締まる
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥ブロック
- 7 10YR3/2黒褐色砂泥粘質混入
- 8 10YR4/4褐色砂泥 瓦多量
- 9 10YR3/2黒褐色砂泥粘質 (抛山)
- 10 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (平安の整地層)
- 11 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 10より締まる
- 12 10YR5/2灰褐色砂泥 固く締まる

図6 立会調査断面柱状図 (1:20)

瓦片が混入しており、整地のために入れられた層の可能性はある。

No. 15（講堂西側水路西） 地表下 0.4 mで瓦を多量に含む褐色砂泥層を検出した。中世から近世の瓦が混在しており、近世以降の整地層であろう。地表下 0.5 mで検出した暗褐色砂泥粘質層は地山である。

No. 16・17（金堂西側水路西） 地表下 0.7～0.8 mまで掘削するが、盛土・既存管の埋土のみであった。

No. 18（金堂南側） 地表下 0.3 mでにぶい黄褐色砂泥層を検出した。平安時代の整地層の可能性はある。

No. 19（金堂東側水路南西角） 地表下 0.2 mで土師器小片・瓦を含むにぶい黄褐色砂泥層を検出した。0.4 mで上層よりさらに固く締まる層を検出した。時期は不明であるが、整地層とみられる。

No. 20・21（東西水路南側） No. 20は地表下 0.25 mで焼土層を検出した。さらに 0.38 mで凝灰岩を検出した。東寺の金堂東回廊西端に該当する。No. 20では工事掘削はこの凝灰岩直上にとどめ、現状保存とした。No. 21は地表下 0.28 mで灰褐色泥土粘質層を検出した。No. 20で検出した焼土は、ここでは検出されなかった。

No. 22（南北水路西側） 芝などの植栽の盛土が厚く、この付近はすべて盛土内の掘削であった。

No. 23（北築地南面） 地表下 0.25 mで平安時代の整地層を切って幅 0.25 m、深さ 0.15 mの土坑を検出した。土坑内から平安時代後期の土師器皿が出土した。築地内溝の可能性もある。

## 4. 遺 物

出土遺物は整理箱に 3 箱あり、大半が瓦類である。土器類は土師器・瓦器・灰釉陶器・染付・陶器で、いずれも小片である。立会調査No. 23 から平安時代後期の土師器皿が出土した。その他、寛永通寶が 2 枚、1 トレンチから出土した。

### (1) 瓦類（図 7・8、図版 4・5）

瓦類は 1 トレンチの整地層で大量に確認したが、その一部を採取するに留めた。また、立会調査地点においても瓦類を確認した。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塙がある。

文字瓦は 4 点あり、丸瓦と平瓦の凹面に「左寺」と刻印が押捺されたものが 3 点、平瓦の凹面に文字の一部が篋描きされたものが 1 点ある。

軒丸瓦は 3 点あり、立会調査No. 6、1 トレンチの整地層より出土した。軒平瓦は 2 点あり、立会調査No. 12・13 での表採である。特徴的な瓦類については拓影・実測図を掲載し、以下に詳細を記す。

複弁蓮華文軒丸瓦（1・2） 共に瓦当部分が約 5 分の 1 程残る破片であり、文様・胎土・焼成などがほぼ同じであり、同一の瓦窯で制作されたものと考えられる。瓦当面に比べ周縁の幅が 0.9 mmと狭い。瓦当面の一部に自然釉がみられる。文様は『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告

書』の NM63 に類似する。胎土は砂粒を含み、2には2cm大の小石も含まれる。焼成は良好、色調は 10G5/1 緑灰色を呈する。播磨産で、時期は鎌倉時代である。1トレンチ出土。

複弁蓮華文軒丸瓦（3） 瓦当部分が約5分の1程残る破片である。1・2と同じく瓦当面に比べ周縁の幅が0.9mmと狭い。文様は『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』の NM44 に類似する。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、色調は 7.5GY5/1 緑灰色を呈する。産地は不明である。立会調査No.6での表採である。

唐草文軒平瓦（4） 瓦当文様の中心飾り付近の破片である。小振りの瓦で範押しも浅い。文様は中心に一つの珠文を持つ4弁の花文と唐草が確認できる。平瓦部凹面は布目痕をナデ消している。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘く、色調は 2.5Y7/3 浅黄色を呈する。中世と考えられる。立会調査No.13での表採である。

偏向唐草文軒平瓦（5） 瓦当文様の中心部から左側が残存する破片である。範押しは深く、文様は『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』の NH58 に類似する。瓦当顎部はナデ調整、平瓦部凹面はケズリを施している。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘い、色調は N4/0 灰色を呈する。時期は鎌倉時代で、立会調査No.12での表採である。

「左寺」銘平瓦（6） 凹面の狭端部から5.0cmに「左寺」の陰銘を押捺する。「寺」の下半が欠けている。印の外形は縦5.8cm以上、横2.6cmである。凸面は平行タタキを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、色調は N7/0 灰白色を呈する。播磨産で、時期は鎌倉時代である。1トレンチ出土。

「左寺」銘丸瓦（7） 凹面に「左寺」の陰銘を押捺する。「左」の上部が欠けている。印の外形はない。凹凸面共にナデ調整を施し、凹面は布目痕を消している。胎土は小石を含む、焼成は良好、色調は 2.5Y8/3 浅黄色を呈する。播磨産で、時期は鎌倉時代である。1トレンチ出土。

不明銘平瓦（8） 凹面に「空」がヘラ描きされている。力強く描かれており、深いところでは4mmも彫り込まれている。「空」の一部とも考えられるが、下部が残存していないため不明である。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、灰釉陶器、瓦		丸瓦1点		
鎌倉時代	瓦器、瓦		軒丸瓦3点、軒平瓦2点、文字瓦4点、平瓦3点		
江戸時代	染付、陶器、瓦、銭貨				
時期不明	埴		埴1点		
合計		4箱	14点（1箱）	3箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

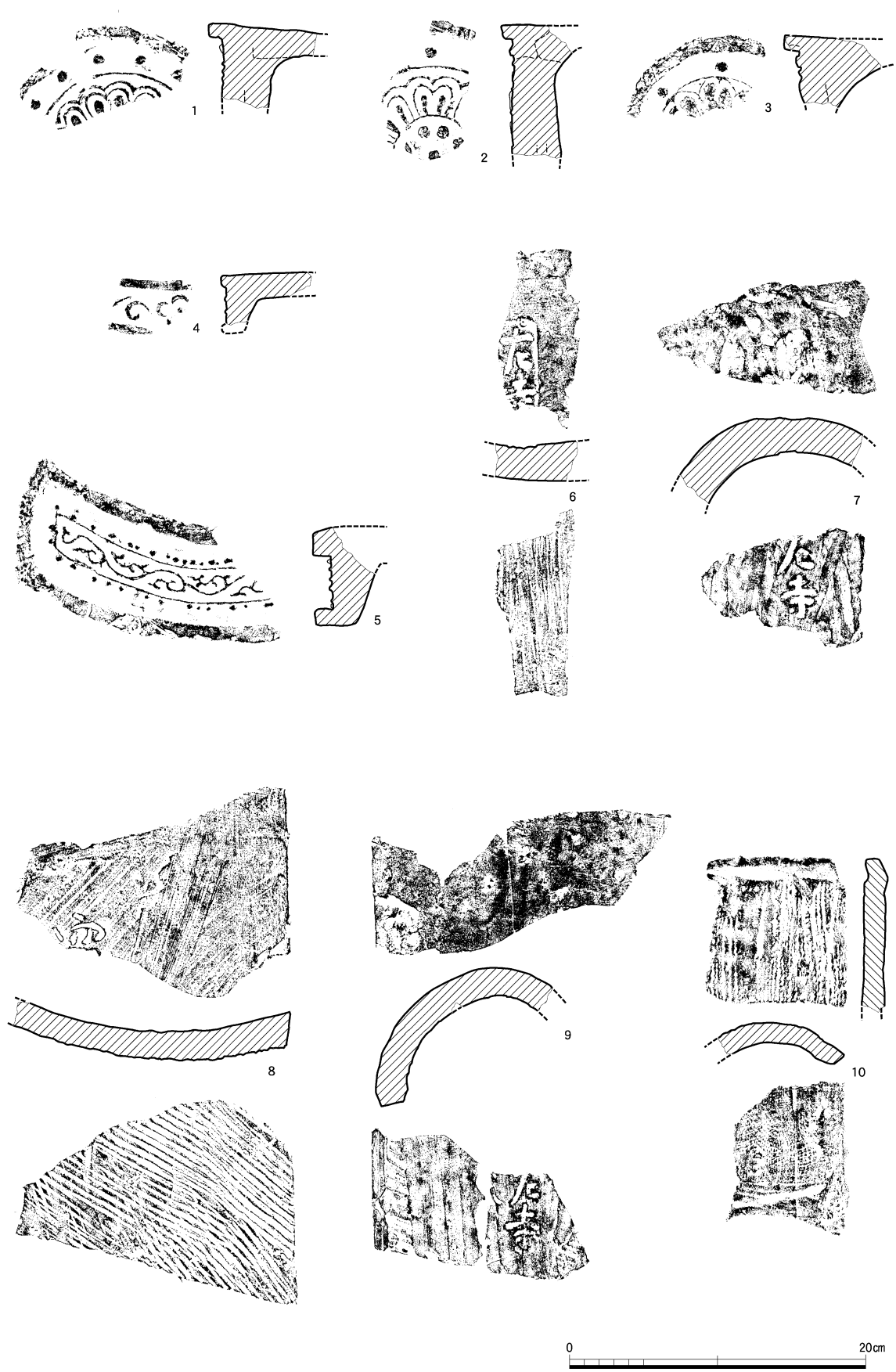


图7 軒瓦·文字瓦·丸瓦拓影·実測図 (1 : 4)

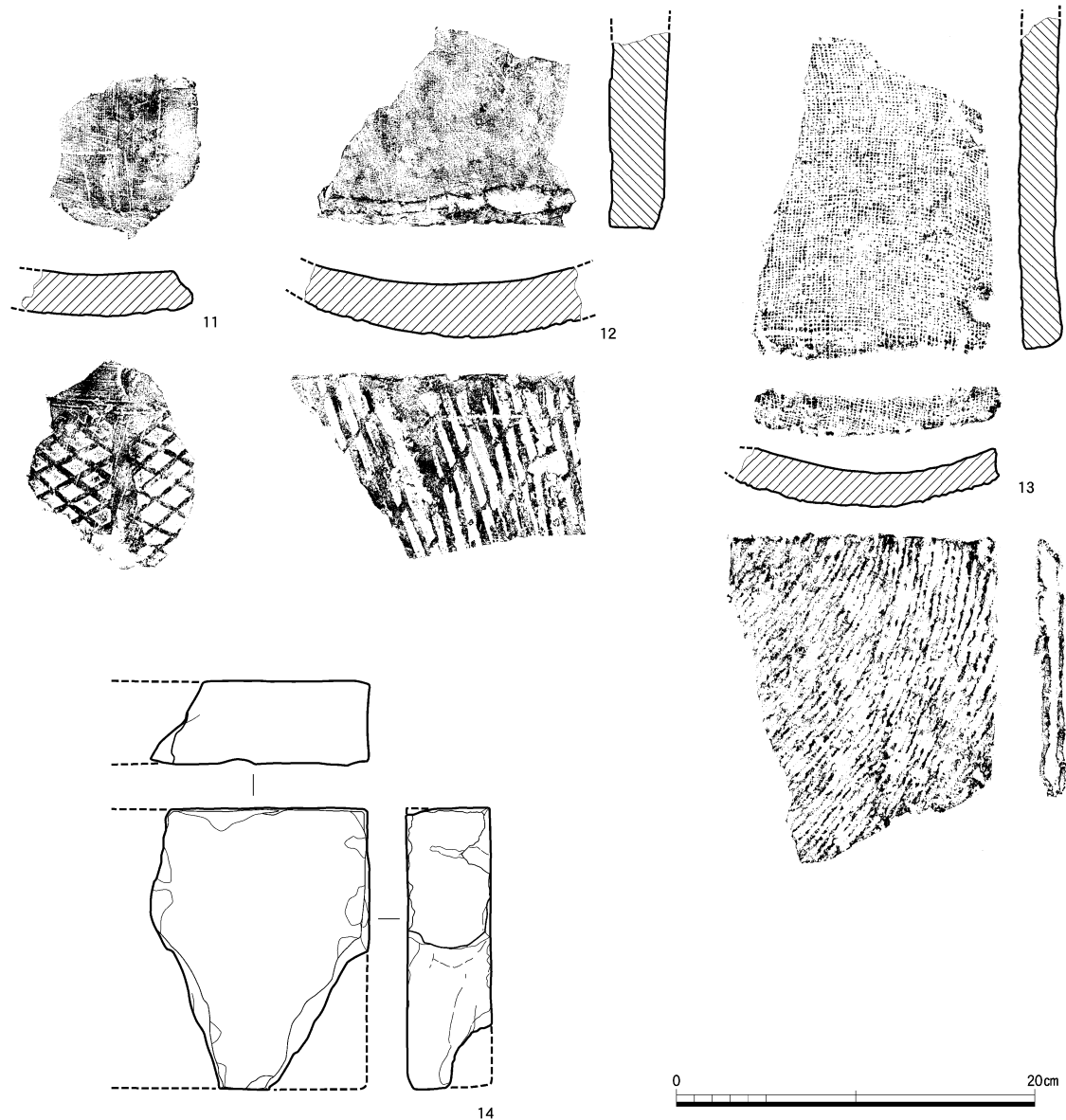


図8 平瓦・塼拓影・実測図（1：4）

凹面には布目痕が残り、一部ナデ調整を施している。凸面には平行タタキを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、色調は5GY8/1 灰白色を呈する。1トレンチ出土。

「左寺」銘丸瓦（9）凹面に「塼寺」の陰銘を押捺する。「左」の上部が欠けている。印の外形はない。凹凸面共にナデ調整を施し、凹面は布目痕を消している。胎土は精良、焼成は良好、色調は5GY8/1 灰白色を呈する。播磨産で、時期は鎌倉時代である。1トレンチ出土。

丸瓦（10） 端部の破片である。凹面には布目痕が残る。凸面には縄目タタキを施す。端部端面と凹面にはケズリ、凸面には強い横ナデを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は甘い、色調はN6/0 灰色を呈する。産地は不明であるが、時期は平安時代である。1トレンチ出土。

平瓦（11） 凹面には細かい布目痕が残り、一部ナデがみられる。凸面には格子目タタキを施している。胎土は精良、焼成は良好、色調は10YR7/3 にぶい黄橙色を呈する。1トレンチ出土。

平瓦（12） 端部の破片である。凹面には細かい布目痕が残る。凸面には平行に斜線が加わるタタキを施している。端部は端面と凹凸面共に横方向のケズリを施す。胎土は精良、焼成は良好、色調は N6/0 灰色を呈する。1 トレンチ出土。

平瓦（13） 端部と側面が残る破片である。凹面には粗い布目痕が残る。凸面には縄目タタキを施している。端部凹面から端面にかけて布目痕が続いており、ナデおよびケズリの調整はない。胎土は小石を含み、焼成は甘く、色調は 10GY8/1 明緑灰色を呈する。時期は平安時代である。1 トレンチ出土。

瓦（14） 表面と裏面と三方の側面が残る破片である。厚さは 4.7 cm、幅は 15.5 cm を測る。表面はナデ調整を行い、残りの面は粗いナデ調整を施している。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘く、色調は N8/0 灰白色を呈する。1 トレンチ出土。

## 5. ま と め

今回の立会調査は、既存管や水路構築時の掘形により、攪拌された箇所での観察がほとんどであったが、一部で平安時代から近世に至る整地層を確認した。また、発掘調査を実施した 1 トレンチで検出した平安時代から鎌倉時代の瓦を多量に包含する層は、北側に近接する調査で瓦溜が検出されていることや、その他の調査においても境内で瓦溜が検出されていることからみて、これらと同様のものとみられる。出土した瓦類は、播磨産のものが多数を占め、鎌倉時代に文覚により東寺で大規模な修造が行われた際に用いられたものと考えられる。瓦溜は、その後の焼失や再興に伴い整理されたものであろう。

No. 20 で検出した凝灰岩については、掘削幅が 0.4 m と狭いため全様を確認できなかったが、以前の調査で検出された金堂東回廊の地覆や延石などと同じものと考えられ、これまでの回廊復元の成果を追認できたことが、今回の重要な調査成果である。

### 註

- 1) 『洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告』 東寺境内発掘調査団洛南高校班 1981 年
- 2) 上村和直「平安末期から鎌倉初期にかけての瓦生産の一様相 - 文覚の再建・修造事業をめぐって -」  
『帝塚山大学考古学研究所報告 1』 帝塚山大学考古学研究所 1998 年
- 3) 杉山信三ほか『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』 教王護国寺 1981 年





# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききょうおうごくじけいだい							
書名	史跡教王護国寺境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-13							
編著者名	近藤 章子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡 きょうおうごくじけいだい 教王護国寺境内	きょうとしみなみく 京都市南区 くじょうちょういちばんち 九条町1番地	26100	A752	34度 58分 48秒	135度 44分 52秒	2009年11月 9日～2009 年12月9日	発掘調査 約5.5㎡  立会調査 延約530m	防災施設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡 教王護国寺境内	史跡	平安時代	土坑、凝灰岩	土師器、灰釉陶器、 瓦類				
		鎌倉時代	瓦層	瓦器、瓦類				
		江戸時代	整地層、瓦敷	染付、瓦、陶器、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-13  
史跡教王護国寺境内

発行日 2010年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行  
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961